



野作雜記譯說

二

洋学文庫  
文庫8  
C 273  
1





東北韃靼諸國圖誌野作雜記譯說卷之二



和蘭 譯司 長崎 馬場 貞由 奉

命

謹譯

千六百四十三年

日本寬永二十年癸未

東印度通商ノ和蘭

海船

カステリキエムト號スルモノニ駕シテ野作

地方ニ至リ訪知シタルノ紀略アリ茲ニ附ス其

文ニ曰

按ニ前卷茅十九條ニ出ス所ノ詳説ナリ後  
茅三條茅十二條茅十四條茅三之卷茅一條  
茅十二條茅十九條茅四之卷茅十一條共ニ  
同事ナリコレ同船ノ記者各別ナルヲ以テ  
大同小異アルノミ從セ見ルベキナリ  
千六百四十三年茅四月 我春分ヨリ穀雨 二十  
七日ニカステ井リヤレト名ケル海船ニ駕テ野  
作ノ地方ニ到リ其巡檢スル所ノ圖ヲ製スニ按

茅四卷及茅五卷ニ出ス 而テ其紀聞尤多シト  
トコロノ因ナルヘシ 按ニ卯兵エナトイフ高  
イヘ氏其中ウーレイ人ノ俗称ヲ誤リ聞ケル  
乎トイヘル日本人ノ話ニ因ルモノヲ爰ニ記  
ス 自註ニ曰クソレトイヘル人ハ野作本城  
地タル松前ヨリ米酒縮布ノ類煙管及ヒ其  
他ノ諸品ヲ船ニ積テ野作ノ沿海ヲ環テ蓋野  
其土産ノ獣皮鳥羽ト交易スルモノナリ  
作ハ教島攢聚シタル土地ト見エ即日本ノ北  
東ナルヲ云フカレ津及ナボ部トイヘル処ヨリ  
相隔タルヲ凡三十里 按ニ我六十里許コレ且  
ト何レノ地ニテラ作シ

イフコノ「チユンガ」止津ハ北極出地四十零度零  
 六分ニ在リ津輕ノ北邊ナル測量表ヲ見ルニ  
 十一度アリ十五度ハ三十八度零五分ノ処ニ  
 在リ按ニ南部北邊大間伊能忠教カ測  
 「ナボ」ノ海中ニ突出セル岬ヲ和蘭人私称シテ  
 「カーフ・ブ・クレー」ト云岬ヲ云  
 東南ノ国界按ニ仙臺領ト云至ル迄ノ行程  
 凡六十里日本ノ凡アリ  
 百二十里

野作ノ土民住スル所其村落都テ十三アリ即  
 チ「マワメイ」前松「ラカ」按ニ「カ」  
 コンツラウレ「フムイ」グロ「スリ」  
 ケリ「ケシ」ヲウヒツ「ウブ」ボロビツ  
 ベ「サレ」ヲナシ「クル」ニ按ニ「ク」  
 ツ「イ」ツナシ「エサ」及「シロカ子」  
 等ナリ但「コンツラウレ」ム「ノ土人等右  
 ノ地名ヲ自ラ呼ヘルハ少シクコレト異ナル

アリ

野作ノ城地ヲ「マツマイ」ト云自註ニ曰コレ殊

ドノ地ニ此地ノ江湾ヲ「カミン」ト按ニコレ何

カ未ト名テ一大港ナリ其港中ノ海底ハ至テ

深シ船ヲシテ能ク其街口ニ進ムベシソノ街

中ハ即チ野作總督ノ居処アリ按ニ松前侯ノ

其總督タルモノト名ヲ「マツマイ」シマト子ト

云

按ニ日本ノ官人松前志摩守ヲ称シテ志摩  
殿ト云フ関キ殿ヲ連子テ其本名ト思ヒソ  
ノマ、記シタルト見エ即チ「ト子」ハ殿ノ轉  
声ナリ

此總督「マツマイ」シマド子ハ毎歳銀並ニ鳥翼  
自註ニ曰此鳥翼ト云ハ日本ニ及名物ノ皮草  
於テ矢ノ羽ニ用ユルモノナリ  
等数多齎シテ日本ノ都城「エ」上江ニ朝シテ  
レヲ彼總王ニ献シテ礼拜スルナリ其野作ヨ

外字百依  
之流尾子年二月十日  
徳藏  
亥五十一

リ日本ニ往クハ南部部按ニ津輕領ヲ南  
路ニシテ南部部ヨリ江戸迄ハ陸路ナリ

按ニ銀ハ其土ノ産物ノヨクニ見ユコレ臆  
察ノ差ヘルナリ所謂白銀ノ一ツキハタル

ナルヘシ鳥翼ト云ハ必ス鷲ノ尾ナラン

野作エゾノ沿海ヲ巡ルニ北極出地四十二度ヨリ  
四十三度ノ処迄ハ海底ノ深サ總テ二十尋ア  
リテ碇泊スルニ宜シ按ニ東蝦夷地「エソ」ト云フ  
近海ヨリ「コン」ガムト云フ

ノ海ヲ云ナラン此処

凡此度数ニ当レリ

北極出地四十三度ノ処ニ至レハ「トカプ」按ニ

日カ「マツマイ」松「シラルカ」按ニ「コ」ニツラウリ

按ニ「コ」及「クル」スリ等ノ村落ヲ近ク見

タリ但其「コ」ニツラウリ及「クル」スリノ二村ハ「ト

カフ」シ「マツマイ」コ「シラルカ」ノ三村ニ相對シテ

在リ右ノ二村ノ中銀ヲ出ス山アリ「イ」ヘリ  
右ノ処ニ多クハ平地ニメ森林アリ近海ハ最

モ魚類影シ又海岸ヲ去ル<sub>レ</sub>遠カラズメ殺多  
ノ鯨魚現ワル<sub>レ</sub>ヲ見タリ其鯨時トシテ他ノ  
魚ノ為ノニ追ワレテ遂ニ海濱近ク登リ来ル  
<sub>レ</sub>アリ若シ土地ノ犬コレヲ視レハ直ニ海中  
ニ飛ヒ入り走り向テコレヲ咬ヒ殺ス而シテ  
後土人等往テ是ヲ捕ル其犬等自然ニ能クコ  
ノ術ニ慣レシ此魚ノ海上ニ浮ニ出ルヲ見得ル  
<sub>レ</sub>却テ人目ノ及フ所ニアラズ

按ニコノ土ノ犬ヨク鯨ヲ捕ル説未タコレ  
聞見セサル所トイフ但タナシリニラ鱗影  
ク漁獵アル時夷人等漁ニ得タルモノヲ陸  
ヘ取り集ル中ニテ或其所ヲ逃レテ海ニ飛  
込ムモノアリ然レモ其魚已ニ勢ヒ弱リテ  
水上ニヨロク游キマワルヲ土地ノ犬水中  
ニ飛入りテコレヲ取ルモノアリトナリ若  
クハコレ等ノ話説ヲ誤リ聞ケルカ能ク似

カヨイタルトナレハナリ夷地捕鯨ノ業固  
ヨリ無レ偶々漂死ノ鯨ヲ獲ルノミトイフ  
狗兎ノ大魚ノ咬ニ殺ストイフコトハ一怪  
談トイフヘシ

「コンツラレ」<sup>コ</sup>「コンフ」<sup>フ</sup> 及「アクケイ」<sup>ケ</sup>「アツ」<sup>ツ</sup>ノ土人  
我船中ノ人ニ語テ曰此兩村ノ人ト他ノ総野  
作人トハ自カラ讐敵ノ如ニシテ共ニ交ル  
ナシト

按ニコレ迤ハ東野作地ヲイフ以下西部ヲ  
イフナリ

我輩上陸シタル処ハ北極出地四十五度三十  
分ノ地ナリ 按ニ「ツウヤ」ノ東「アツシ」  
其地山丘  
多ク土地總テ高シ其最高ノ山ヲ我方ニテハ  
「ヒツキ・ハン・ア」ントテ「イ」ト各ク  
按ニ彼徒ガ  
私稱ス土人語テ曰コノ近傍總テ銀ヲ出スト  
ルナリ 其地樅松「エ」イケンホ「」  
按ニ榊ノ一種  
ナリ



ノ羨ヲ見誤 及其他大木聳直ニ茂生ニタル尸  
シナルヘシ  
リコレ正ニ大船ノ橋<sup>ホシラ</sup>ニ用ユヘシ此土質ハ皆  
粘柔<sup>リ</sup>産<sup>ト</sup>按ニ菖蒲ノ羨夷地<sup>イナリ</sup>及酸模ヲ  
生ス

北極出地四十六度三十分ノ処ヨリ大湾<sup>按ニ</sup>  
ノ東南ニ向フタル内海<sup>ウ</sup>ナルヲ 中ニ船ヲ進メ  
ヘツ或<sup>ハ</sup>チヤラ<sup>ニ</sup>近海ヲ云カ  
コノ中ニ碇泊スル<sup>ト</sup>四日土人其間ニ漁リ獲  
ル所ノ松<sup>サ</sup>臭<sup>ケ</sup>夥シク千餘斤ノ重ヲ得ヘシ此海

上ヨリ陸地ヲ望ムニ大地ト見ヘテ草木繁生  
ス且爪景モ亦羨ナリ北海濱ノ勝景恰ニ<sup>ア</sup>諸<sup>ケ</sup>厄  
利<sup>ア</sup>西ノ港中ヨリ其地ヲ眺望スルニ等シ又所  
ニ因テハ土地低ク砂石多クメ樹木生セス尤  
耕耘スヘキノ地ニアラス又コレヨリ北四十  
八度五十分ノ地<sup>按ニ</sup>唐太ノ東方ニ突出シタル  
ニ到レハ丘陵多ク処々菜草ノ生ニタルアリ  
此地ヨリ西北ノ界其海ニ臨ムノ處逆ハ一里

大凡日本ニ足ラス 按ニ此地ノ北界ハ四十八  
ノ一里ニ足ラス 度五十分ノ地ヨリ西北ノ  
方一里ニ足ラスト云ハ推察ノ大誤ナリ嘗テ  
此説アルニ依ラテ近世ニ至ルマラモ西洋樂地  
凶ニガカリシト唐太ラニ島トテ見ヘテ往々西  
亞人モ此説ニ因リ製シタルト見ヘテ往々西  
ニ未ルナリコノ因中皆ニ島トテ見ヘテ往々西  
ト是等ノ誤説ヨリ起ルモノナリ詳ニ莽六卷  
余考中ニ此誤リ 此近海碇泊スルニ亘シカラ  
ノ由未ラ辨ス 此近海碇泊スルニ亘シカラ  
ストイヘ凡其海濱ヨリ僅ニ一里半 日本三千里許  
ニ退キ去レハ海底皆砂石ニシテ深キヲ二十  
五尋ヨリ四十尋ニ至ル故ニ碇宿スヘキナリ

按ニ石ノ一條ハ總テカラフ止島ノエトヲ  
云ナリ次條ヨリ又東辺ヲイフナリ

野作ノ本地ノ近海北極出地四十五度五十分  
ノ処ニ到レハ左右ニ島アリ其一方ナルモノ  
ヲ我黨私稱シテ「スタアテンエイト」ト云  
フ 按ニ「リナシ」嶋ノ西稱ナリ即「スタアテン」  
思嶋ニ對メ名ルモノナリ其命名ノ美未詳「ハ」業  
ルヘカラス「エイト」ハ嶋ノ美ナリ深意曉又一  
方エレニ對スル嶋ヲ姑ク名ケテ「ハ」業思

嶋<sup>ユラト</sup>ト云 按ニコトコフ嶋ノ西祿ヨムバグニイ  
シ此ニ島ノ名義ノ 其ニ島ノ間海上凡十四里  
畧<sup>ニ</sup>卷ニ説ク 按ニ我ニ十八里許  
エレ切当ヲ得ス アリ予等此コトバグニ一  
スエイラシトノ中積雪解ケテ海中ニ流レ注  
ク処ニ上陸ス 按ニ茅四卷中出ス所ノ「エトロ  
ニ於テ臨写スルモノト見ニ 此ノ時ニハ  
或ハコレ「コレ」ノ地カ此地ノ土質自カ  
ラ光沢有テ恰モ銀砂ノ交リタルカ如クニメ  
其色自シ又ツ「ド」アト 按ニ此物草ニ白砂ヲ  
灰ノ一種

交ヘタルカ如クニエテ硬カラス是ヲ取テ水  
中ニ投スレハ皆化メ解散スルナリ 按ニ或人所  
地ノ産ト云フ砂ヲ見ルニ灰色ニ銀粉ヲ交ヘ  
タルカ如ク光リアリ或ハコレ等ヲ見テ云カ  
此地ニハ岷々タル高山多ク且処々ニ洵谷ア  
リ其辺皆酸模及蕪ノ類多ク生ス然レモ樹木  
少シ唯「ルケ」ニボトト和蘭本草「ト」ニウ  
トハ赤楊ハシノキナリ然ルニ夷地此物ヲ産  
セス楢ハ所ニ多シトイフ恐ラクハコレヲ見  
テ誤レルモノ及「エ」ニ樹コレニ赤楊ノ一種ナリ  
ナルベシ

此一方ナル「スタアラニ・エイラニ」トシテモ  
 赤樹木ナク唯壁立ニタル高山アルノミト見  
 エルナリ  
 北極出地四十五度十五分ノ地ニ到ル此処ヲ  
 シルへ処々ニアリテ少カニ林ヲナスノミ此東  
 北ナル海岸ハ波浪極テ烈ニ都テコノ近海碇  
 泊スルニヨロミカラス且海濱ニハ岩石甚タ  
 タタシ  
 此一方ナル「スタアラニ・エイラニ」トシテモ  
 赤樹木ナク唯壁立ニタル高山アルノミト見  
 エルナリ  
 北極出地四十五度十五分ノ地ニ到ル此処ヲ

土人自称シテ「アクケイ」ト云フ按ニ「アクケイ」トハ  
 ラニ然レド「アツケ」ニシテ北極出地四十五度十  
 分トイヘレ「渡」ハ恐ラクハ原文ノ書損ナリ  
 カ又ハ其邊ニ「アツケ」ヨリ来リ人アリ和  
 策人其土名ヲ「アツケ」ト云フハ「アツケ」ハ  
 所ノ「アツケ」ト云フハ「アツケ」ハ「アツケ」ハ  
 ラ此処ノ名ト思ヒシト云フハ「アツケ」ハ「アツケ」ハ  
 伊能氏ノ測量ニハ四十三度零三分トアルハ  
 十リ且「アツケ」ニ載スル所ノ地圖ヲ見ルモ亦  
 其非ナラト云即此処ハ縦二里日本ノ横一  
 里半日本元許リノ大湾中ニ在ルナリ其海岸  
 ナル地高ク其地質粘柔ニシテ草木茂盛ス又

種ヲ播サスシテ自然ニ葡萄桑実按ニ此実

黒色ノ絲杉ノ実山胡椒按ニ此モノトカケ河

見タリ但実入りヨ覆盆子ノ実ヲ産ス按ニ共ニ榊ノ実

ケンボームゲレー子ボトム按ニ共ニ榊ノ実

誤ルモベル在樹前ニ赤影ク生ス澗谷ニハ長

ク犬餘ニ及フ鳥尾註前ニヲ生ス其河岸ニハク

イト按ニグトハハ草ノ英ノ名ナリリリシノ

或ハ苧ヲ見誤ルカ又ハ矢幹ニ作ルトトイフ條

アレハ恐ラクハクマサ、竹ヲ見テ云カノ生

苻藤苻管ノ類モクトトハ呼ヘハナリ

ス海濱ニハ貝品極テタシ又其中玫瑰即ハマ

名コアリ美好観ニ勝タリ

海中牡蠣彩シ皆大ニシテ其長サ五六寸ヨリ

尺ニ至リ幅三寸許アリ然レモ其味ハ却テ甘

カラス此国中都テ野羊豕雁鷄ノ類アルナ

シ但黒色ナル大熊或鷹及鷲ノ類ノミアルナ

リ按ニアツケシ牡蠣多キテ曾テ聞クトコロ

ナリ土地多ハ蛎殼ニテ地面トナルカ如シ

少シク地ヲ掘レハ  
皆坊房ナリトイフ

野作一統ノ土人姿貌總テ同シ各長ク短ク軀

體扁濶ニシテ横ニ廣シ髮ハ長ク粗毛满面ニ

生スコレヲ古代ノ支那人ノ如クニ剪リタリ

頭髮ハ唯其頂中ヲ裁ツナリ眼黒ク鼻高ク額

扁平総身黄色ニシテ肌膚ハ粗ナリ其面黧甚

ク醜キトモアラス其婦人ノ顔色ハ男子ヨ

リ白ク前髪ハ面部ニ覆ワサル程ニコレヲ裁

ツ又生ミタル終ニシテ瓜哇ノ婦人ノ如ク束

子テ纏ヒ結ヘルモアリ眉唇ハ悉ク黒色或ハ

紺色ニ染メタリ按ニ是黧ヲ見タルナルヘシ

土俗更ニ佛法ヲ修スル者ヲ見ス又食ニ臨テ

修法スルヲナキテハル機示ハル襪里亞人ノ如シ

按ニ西洋ノ諸国多クハ其食時毎ニ神名ヲ

唱ヘテ而後食スルヨシ亞弗利加洲中機示

襪里亞人ノ如キハ更ニ教法ナク固ヨリ食

ニ臨テ修法式礼ナシトソ故ニコレヲ以テ  
野作人ノ食時ニ修法ナキニタトヘテ云フ  
ナラシ

然レ凡彼等火辺ニ於テ酒ヲ吞ム寸ハ二三滴  
コレヲ火中ニ點スコレ猶心ニ修スルコト有テ  
コレニ祭ルカ如クニ見ユ自註ニ曰韃靼ノ中  
アリ又糞ヲ以テ削リ糞ケニ造リコレヲ処ス  
ニ建ツ又空中ノ壁ニモ懸ク若シ病者アレハ

又小刀ヲ以テ新ニコレヲ造リ其病者ノ頭及  
手腕ヲ纏ヘリ又「ベス子イデ」ニ此ノ法ヲナス  
トイフヲモナシ

按ニ「ベス子イテ」ニスハ男子ハ莖頭ノ皮ヲ  
断チ女子ハ陰門ノ鶏舌ヲ断ツコトナリ昔テ  
肉リ印度瓜哇等ノ土俗十三歳ニ至レハ男  
女共ニ是法ヲナシテ其宗徒ニ加ワルノ證  
トストイフコレヲ和藁名ケテ「ベス子イテ

ニスト云フ瓜哇語ニテハ「ス」ナドトイフ  
ヨシナリ

固ヨリ国政ノ法律ナク亦文書ナシ其土人遠  
流進放セラレタル者ノ如ク行状乱雜ニシテ  
素ヨリ酋長ナシ此処ニ於テ見タルモノ毎ニ  
頭中皆刀痕アリ

一男二婦ヲ娶ル其妻タル者ハ曰「按ニビ  
蒲ナリ蒲ナリ燈心草ナリ夷地共ニコレヲ産  
セス楚ニ作ルモノハ「キナシト云草ニメ即驚麥

其美五種アリテ蒲ニ似タルモノ  
ナリト云ヘハ恐ラクハコレカ  
ヲ製ス又食ヲ調理シ又夫ノ衣服ヲ縫フ又其  
夫山中ニ入テ薪ヲ樵シハ往テコレヲ負ヒ舟  
中ニ積テ吾家ニ運送ス能ク舟ヲ漕ク男子  
ノ如シ他国ヨリ来ル者其妻又ハ其処女ニ戯  
ル、ヲ見レハ甚コレヲ如ム固ヨリ姦淫ヲナ  
スモノハ忽チコレヲ殺ス男女共ニ最モ酒ヲ  
嗜ム其酔フテ亦速ナリ相艶有テ相貌恐ルヘ



シトイヘ凡他国ノ人ニ交テハ更ニ偽リ欺ク  
等ノトナク素性正実ニシテ魯直ナリ彼等異  
方ノ人ニ遇スル時ハ皆衣服ヲ新ニメ飾リタ  
ラ畏縮シテ其前ニ座シ頭ヲ垂シ拳ヲ揺シテ  
其人ニ礼拜ス其謳歌ハ頗ル日本人ノ吟哦ヲ  
聞ニ等シク音声ヲ震ワスルナリ外国ノ者彼  
レニ事ヲ附託スレハ大ニ喜悦シテ速ニ承諾  
シコレヲ懇ニ勉強ス

懐妊ノ婦人産ノ期ニ及デハ一室ニ獨居セシ  
ム産後三七日ノ間ハ男子其所ニ近寄ラスト  
ナリ其児童幼穉ノ頃ハ皆色白ニ予親シク其  
児ニ乳ニシムルヲ見ルニ其母己カ衣服唯乳  
房ヲ出ス許リニメ吮シメ他ハ掩フテ其膚ヲ  
見セサリニ晴天ノ寸ハ童男童女トニ裸程ニ  
メ行走シ更ニ衣ヲ着セズ若シ他国ノ人ニ道  
路ニメコレニ逢ヘハ大ニ耻テ頭ヲ垂レテ

足ヲ屈シテ傍ニ匿ル及婦人ノ子ヲ負フヲ見  
ルニコレヲ衣ニ包ミ紐ヲ躡ヒ結テ以テ頭上  
ニ懸ク席ハ皆定テ敷ク其酒食ノ製ハ甚不潔  
ナルヲ好マス然ルニコレニ及メ衣服ハ又殊  
ニ穢ク且絶ヘテ沐浴スルコトナシ海岸ニ在  
ル家作ノ形様ヲ見ルニ皆削リ板ヲ接合シ四  
面ヲ囲ミ屋上ハ樹皮ヲ以テ覆フ其他陸地ニ  
アルモノハ總テ柱ヲ建テ樹皮ヲ以テ四周ヲ

圍ミ屋上亦コレヲ以テ覆フタリ其屋上ノ中  
央ニハ皆煙ヲ漏ス窓アリ又其家内ハ板ヲ以  
テ幅丈餘長二丈許ニ區別シテ席筵ヲ敷ク中  
カニ頗ル美飾ヲナシタルアリ其家ノ高キモ  
ノハ凡ソ人ノ長ケニ倍ニタル許ニ至ルアリ  
其家作殆ント和藁ノ辺鄙ニテ松ノ柱ヲ以テ  
建タルモノニ似タリ門戸ハ甚卑ニ故ニ人々  
屈セサレハ出入スベカラサルナリ傭人家ハ

牧多撥聚ニタル所ナリ皆処々ニ散在ス予既  
ニ見及タル家数最モ多シト云ヘキモノ二十  
戸ニ過ス都テ一村ノ家数ハ六七戸ヨリ十一  
二戸ニ至ルナリ其部落亦コレト彼レト相距  
ルノ間半里日本凡一里ヨリ近キモノナシ每家ニ  
有ル所ノモノ唯蒲定考見卧床ノミコレヲ他  
ノ器財スヘテナシ

日本製ノ衣服及銀器ハ皆彼等ノ羨觀トスル

モノナリ嘗テ「アツケヒ」アツケヒノ中冬月  
大酷寒大飢饉ナルヲアリト其時土人死スル  
者甚夥シ其尸ヲ葬ムルハ皆坊教ヲ以テ其上  
ヲ掩フサテ櫃ニ斂メタル尸ヲ小堂中ニ安置  
シテ祭ルモノ、如クシタルアリ然レモ其内  
ニ奠供ノ具更ニ見ヘズ但堂ノ造作ハ頗ル羨  
ナリ

都テ野作ノ食物ハ魚類蕨内蕨油野菜及玫瑰

実ノ未熟綠色ノモノ等ナリ其玫瑰最モコク  
ケイ<sup>アツ</sup>ニ<sup>ケシ</sup>ニ多シ<sup>ケシ</sup>復月コレヲ採リ貯ヘテ以  
テ冬月ノ食トナス又國中ニ生スル罌粟殼<sup>按</sup>  
夷地産スル<sup>トヲチカス</sup>及所獵ノ鳥類皆彼等食物トスル  
モノナリ其食ヲ盛ル器物ノ形圓ナルアリ方  
ナルアリ皆漆器ナリ每人別器ヲ盛り箸ヲ用  
テ食スルナリ

按ニ元々西洋人ハ食物各大盃ニ盛りヨレ

ヲ盤ニ載セテ皆相集テコレヲ分ケ食ス  
レ其別器ニ盛テ一人毎ニ食フナリフハ西  
人ノ奇觀トスヘシ故ニ云々爾ナルヘシ

特リ赤道北緯四十八度五十分ニ在ル処<sup>按ニ</sup>

云唐太ノ東ニ向テ<sup>前ニ</sup>突出ニタル岬ヲ云ノ土人ノ如キハ然ラス皆

指頭ヲ以テ撮ミ食フ且其言語亦他ノ野作ノ

土人トハ異ナリ衣服ハ日本製ノ如キヲ着シ

又日本人ノ如ク前髪ヲ剃ル面躰亦他ノ野作

人ヨリハ稍白シ按ニコレ松前ヨリ遣リオケ

何レニコレハ日ル刃之番人等ヲ見テ云フカ

本人ナルヘシ

凡ソ衣服皆日本製ニ似タリ然レモ絹布ヲ用

ヒス綿布ニ種々ノ形ニ青色ヲ以テ彩飾シタ

ルモノカ或ハ又日本ヨリ持渡ル綿服ヲ着ス

又自製ノ綿服ヲモ着スルアリ其服ノ製袖ノ

所ニ至テ漸ク狭シ又其服ニ緋キス片ヲ以テ十字

形或ハ種々模様ヲ縫ヒ成シテ以テ飾トナセ

リ又歎皮ヲ以テ製タル服アリ男子ノ服皆前

身ノ所開キ婦人ノ服ハ前身開テ我方ノ汗襦アハ

ヲ見ルニ等シ

按ニ西洋ノ汗襦ノ製ハ前身ノ一匹縫ヒテ開

合ス故ニ蝦夷ノ婦人ノ服ハ汗襦ニ等シト

云フト見ヘタリ

土人天性皆怠惰ニシテ農業スルコトナシ但其

海濱ニ居住スルモノハ樹木ヲ斫テ小舟ヲ造

リコレヲ海ニ浮メ和菓農夫ノ用エルヲタルキ  
スユイ止ノ小舟ノ如ク櫓ヲ以テ此方彼方ニ旋  
廻シテ釣ヲ釣リ或水獸ヲ獵ス其携ヘ往クト  
エロノ獵具ハ獸骨ヲ以テ造リタル鋒ナリ其  
尖リニ鉄或銅ヲ打定シタルモノヲ鏝フタル  
ナリ其漁獵ニ用エル網ハ和蘭ノ製ニ同シマ  
ナリ山中ニ生スル麻アリコレヲ採テ以テ絲  
ヲ製スユノ製法ヲ見ルニ其粗麻ノ一端ヲ口

ニ含ミ下ニ垂ルトコロヲ両手ヲ以テ揉ミ細  
カニ裂キ而メ後コレヲ紡クナリ  
鳥ヲ捕ルニハ膏弓ヲ用ス其製先ツ片木ヲ以  
テ弓ヲ造リコレニ絲ヲ張り其弓ノ中央ニ小  
孔ヲ穿テテ中ニ餌ヲ収ム鷲鳥鴉ノ類末テコ  
レヲ啄ミ誤テ其孔中ヲ足ヲ容ルレハ忽共弓  
飛彈シテ鳥乃チ動キ得サルナリ  
毎歳一度日本人米酒衣服煙管烟袋或漆髹ノ

碗シヤク及銀鉛ノ小銀耳飾トナスモノ又斧小刀  
等及其他ノモノヲ齎シ往キテ野作ノ魚類鯨  
油肉獸皮鳥翼等ノ類ト交易ス野作人亦頗ル  
交易ノ道ニハ敏シ然レモ更ニ邪曲ノ姦ヲ用  
ユスルヲナレ其言悟少シク日本語ヲ交ヘ用  
ユルトイヘリ按ニ東北ノ夷俗ヲ混説ス  
北極出地四十六度ノ地按ニ唐太ノ南岸ニテスレト云ナリ  
住ム土人甚々鐵ヲ貴フ鳥翼或獸皮ヲ齎シ未

テ鐵ト交易セシヲ乞ヒタリ  
武器ハ弓矢及刀ヲ用フ其形殆ント日本刀ニ  
似テ其鏑ニハ銀片ヲ纏フコレヲ帶スルハ紐  
ヲ以テ腰ニ結フ矢筒亦紐ヲ以テ頸ヨリ右股  
ニ懸ク其弓ハ「エスセ」ニホウト按ニ秦皮ナリ未タ夷地有無  
ヲ聞カス但弓材トナストハユミハコニコトイ  
フ木ニ當ルカ又夷人杜仲ヲ用フモキケリ  
ヲ以テ造ル其長サ凡五尺余矢ノ長サ尺餘蘆  
ヲ以テ造カ按ニ蘆ト云モノハ竹ナリカ其尖ニ黒色

ノ毒膏ヲ塗ル若シ此矢ニ中ルモノハ其毒ノ  
為メニ死ス彼等何レノ地ニ往クトイヘ此弓  
矢ト一刀ヲ携ヘサルヲナシ恒ニ此等ノモノ  
ヲ帶ヒテ山林ニ入テ熊鹿ウラニツ按ニ鹿ノ  
名ツナカハ魯西亜ニテカレシト云ナリ漢土  
ニ馴鹿ト名クス清一統志ニ俄倫ト譯スルモ  
ノ即カレシニテ此及其他我方ニハナキ所ノ  
猛獸及鳥類ヲ射ルナリ  
彼等簞敵トスルモノヲ捕ヘ得レハ毎ニ其者

ヲ立タシメ腰ヨリ以上半身ヲ裸ニシテ人ヲ  
メ其両手兩足ヲ動かサル様ニ固持セシメ又  
一人棍ノ端ニ鐵片ヲ纏フタルモノヲ持ツ其  
將ニ彼俣ヲ打ントスルトキ其棍ヲ提ケ十二  
三步モ後ニ退キ両手ヲ添テコレヲ掉轉フリスシ輪  
ヲ画クカ如キ状ヲナシテ彼ニ走セ向ヒ跳リ  
上ツテ其脊ヲ打擲スルヲ毎回此ノ如クシ其  
息ヲ絶ルヲ期トシテ止ム他人ノ妻或処女ニ



姦淫スル者 アレハコレヲ罰スルヲ法亦此ノ  
如シ

○我輩嘗テ水客舟子等ニ命メ右イフ地方ニ至ラ  
シメシハ元未鞑靼ノ中「カタ」按ニ契丹欽トイフ国  
ニ「ホリ」サシゴト称スル大河アリト聞ケルニ由  
テ其地方ヲ指シテ行キ到リコレカ実ヲ究メ得  
セシメントスルニ本ツケリ然レト其人等其地  
ニ到リ達セリルヲ以テ当時其事ヲ遂ケス後他

ノ実験ノ説ヲ見ルニ「ホリ」サシゴトイフ河ハ其  
地ニアルニ非ス支那ノ中ニ在ルモノニメ土人  
コレヲ「グリン」ト称スル河ナリト其名義ハ「  
ラッヒク」ヲヒト止按ニ此二言トイフノ意ナリト  
即此河ヲ「ホリ」サシゴト呼ビ做セシハ西鞑靼ノ  
人「ハ」ウリユエナル者支那ニ乱入メ争戦セシ頃日  
ワノ称ナリトナリ私ニ按ニ元朝トナリ然ルニ石  
ニイフ如ク東鞑靼ノ中「カタ」トイフ地ニアル

一大河ナリト世傳ヲ受シテ以テ我輩初メハ大  
ニ疑ヲ積ミタリキ又今世「アルシ河」ト呼ベルモ  
ノモ恐クハ其別称ナラン乎又コレト同キ訛轉  
ノ一アリ韃靼ニテ「コマンチ」トイフ語ハ蛮猾ノ義  
ナリトコレ韃靼ヨリ其南支那地方ノ人ヲ賤メ  
侮リテ呼フ所トイフコレヲ我方ノ人ハ地名ナ  
リト推シ定テ支那ノ北部ニ「コマンチ」ト名クル一  
属国アリト思フモノ頗ル多シコレ正ニ右ノ大

河支那ノ中ニアルヲ「カタイ」ノ中ニアリト誤リ  
記シタルニ相同シキナリ

按ニ此河ノ実ヲ深ク求ムルノ意ハ船ヲ送リ  
テ交易ヲ開ントスルニ出ツ余其所在未タコ  
レヲ辨セストイヘルカ、ニ其疑ヲ所モ其定  
ル所モ共ニ恐クハ傳聞失誤ニ過サルカコレ  
ヲ論スルモ尚益ナシトイヘル思フ所見ル所  
ヲ以テコレヲ評セン「カタイ」ハ契丹ナルベシ

韃靼ノ中ニアレバナリ「ホリサシゲ」ハ「フリン」  
ホノ「フ」ニハアラサルベシ後條ニ愚註ス韃靼  
ノ北極出地二十九度二十分ノ処ニ在ル「ボウ  
ト」ト云地名ノ訛音ナラン詳ニ次卷ニ註ス  
ルカ如シ「フリン」・「ボ」ハ「濁河」ノ義ニテ支那ノ中  
ノ大河トナラハ黄河ニメ「フリン」・「ボ」ハ黄河ノ  
漢音ノ轉声ナルベシ「ヨ」グ子ル「トイ」フ人ノ地  
理書ニ支那ノ地ニ二大川アリ其一ヲ福昌墨

阿トイフ 按ニ黄河コレ「ゲ」ル「ヒ」ル「ハ」  
黄リヒ「ノ」義ナリコレ其水流恒ニ「濁」ルカ故  
トハ河ト云云コレヲ係セ考クルニ「フリン」・「ボ」ハ黄  
河タル「ト」必セリ「ア」ハ「ヒ」河亦「コ」ノ別称ナルベ  
シトイフニ至リテハ大ニ誤レリ「ア」ハ「ル」ハ西  
人呼フ所ノ黒龍江ナリコレト「迥」カニ異ナリ  
其辨「コ」ノ「贅」セス「〇」マシケ「ヒ」ノ考亦大ニ差ヘ  
リ韃地ヨリ其南支那ノ地ニアレモノヲ「マン

シニト呼フコトハ野鄙ノ人トイフコ  
トニテ北人ヨリ南人ヲ侮称スル語トイヘリ  
其事ハ能ク合シ能クアタレリ其侮称ノ韃語  
ヲ西洋人支那北部ノ国名ト思ヒシハ誤リナ  
リト譬諭ノ辨シタルハ又誤ナルヘシ彼地名  
ニ称シイフモノハ所謂滿洲ナルベキカコノ  
書ノ撰者ノ誤リナリトイハシハ却テ推究メ  
誤ナルベキナリ

前條ニ説ケル二千六百四十三年日本寛永二  
十年癸未我  
国ノ船「」部南ノ一港ニ着岸セシ時日本船ノ其  
所ニ碇宿スルモノアリ其船師日本紙ニ画キタ  
ル地因テ我舟子ニ見セタリ即其因ハ日本ヲ主  
トシ朝鮮「」マニルラ按ニ呂宋  
一名等及ヒ日本ノ北  
凡百餘里ヲ隔テシ大國ヲ画キタリコレ韃靼東  
方ノ地ト相接シタルモノナリ彼等專ラ此因ヲ  
信用スルト見エ我人船ニ駕シテ韃靼ノ沿海

ヲ遍歴スルトイフヲ聞テ甚ク怪メリコレ石  
ノ凶ハ韃靼ト亞墨利加ト相接シタル地図ナリ  
亘ナリ彼コレ信用スルヲ以テコレヲ怪シシタ  
ルナルベシ

按ニ此凶ノ一大国トイフモノハ亞墨利加洲  
ト和藁人ハ知レリト見ユ然レヒコレ昔時未  
審ノ時ノ考察ナリ

其時和藁人又曰本人ニ語テ曰赤道北緯五十六

度ノ地ニカタシトイヘル国アリ其中ニ氷リサ  
シケト云一大河アリコレ其國中遠ク百余里許  
リノ処ニ水源ヲ起シテ其末流海ニ注ク尤其河  
岸ニハ処々繁華ナル市街アリテ所在海船ノ運  
漕アルナリ按ニ此説ハ又ホリサンダラ  
○我水客等ニ命令シテ亞細亞ノ北海ニ到ラシム  
ルハ既ニ云フ如ク元ト日本ノ北境ヲ過テ其西  
北ノ方ニ舟ヲ進メ韃靼ノ海岸自註ニ曰支那ト  
韃靼ト其界ヲ接

スル処ハ北極出地  
四十五度ノ地ナリニ到リソレヨリ其沿海ヲ渡  
テ赤道北緯五十六度ノ処ニ達シ其地ノ大河ボ  
リサング及<sub>レ</sub>其度ヲ得ル海辺ノ市街ヲナス所ヲ  
訪尋セシメンカ為ナリシニ其時ハ故障有テコ  
レヲ遂クルヲ能フザリキ按ニコレ初條ト同事  
ヲ異ニスル  
ヲテナリ

○航海諸子ノ説ニ和策国ニ於テ製シタル日本図  
ハ未タ其詳ヲ得ス日本ノ所在本往ハ尙遠ク野

作ノ方ニ銳出スベキナリ

○野作人ノ性質羊ハ日本人ノ如ク羊ハ支那人ニ  
似又少シク韃靼人ニモ似タルトコロアリ

○野作ヨリ「サル」ト按ニ「サル」トハ鯨ヲ日本ニ齎シ  
ナリ漢名樹魚未テ交易スルアリ又日本ヨリ其尙鮮ナルカ如  
キモノヲ以テ遠ク長崎ニモ致スモノアリ按ニ  
サケシホビ  
キナルヘシ

○野作人ハ日本及支那ニテモ用ヒサルトコロノ

一種ノ服我婦人ノ服用スコルヲニ  
按ニ其製未  
タユレヲ詳

セスニ似タルモノヲ着ス但鞆鞆人モ毎ニコレ

ヲ服スルナリ  
按ニ鞆  
ヲ云フナリ

○野作人ハ男女童子ニ至ルマテ耳垂ニ小孔ヲ穿

ツコレ日本人及支那人ノ爲サバニ所ナリ鞆鞆

人ハ皆斯ノ如キ俗習ヲナス

○日本人ニハ未タ詳ニ野作ノトヲ識ルモハナシ

トキ口ニ既ニ跋太亞勝亞ニ在留セシセルハナシ

スカラモエトノ和菓人ナル者ハ博識ノ人ナリ其存

在中予ニ語テ曰ク日本人往古国王ノ命ニ依テ

野作地方ニ往クアリ然ルニ其路程食料ニ乏

シ故ニ遠ク其土ニ到ルヲ能ワスレテ遂ニ帰国

スト又日本ハ大小諸嶋横簇シテ一國ヲ為シ其

西辺ハ最モ朝鮮ニ近シ即今時新製ノ凶ニ載ヌ

ルカ如シ朝鮮人ハ日本及支那ニ入貢ス而シテ

其支那ヨリ牧多ノ絹帛ヲ買ヒ求メテ日本ニ運

送し交易ヲナスト云フ 按ニ此 説未聞 或人ノ話ニ聞ク野  
作地ノ土人姿貌皆猛勇每ニ皮服ヲ着シ禽獸ヲ  
獵テ常食トス皆テ和菓人彼ニ向ヒ其国ノ境界  
ヲ尋問シタレテアリシニ言語互ニ通セズ人其  
審詳ヲ得ス彼唯己レカ髭ヲ以テ擬ヘ格レルヲ  
見ルニ尚コノ地ハ遠ク北方ニ廣シト云テト見  
ヘタリトナリ

○叢ニ跋太亞斯亞ニ在留ニタル「ケレイエルトイ

フ人ハ元ト日本商館ノ首長ニメ博識有名ナル  
人ナリ 按ニ「ケンイエルトハ彼ノ一千六百八十二  
年我天和二年壬戌ニ渡来シタル「アニテ  
リス「ケンノエルト云加比丹ナリ詳  
ニ「ア「レン「テ「イ「ヒト云昏ニ見ニ  
テ曰日本ノ王都エド「江ニ到ルノ街道各処駅邑  
アリコレ皆海濱ヲ距ル「遠カラス元ト日本ハ  
海水環テ島集リ因ヲナスコノ故ニ都テ旅行  
ノ徒ハ其途中必ス河海ヲ過キ越ヘザレハ其至  
ラントスル処ノ遠キニ違スル「能ハズト云フ



然レハ日本ノ国中ハ船ニ駕テ周廻スヘキナリ  
又トク日本道教ノ輩自国ヲ称シテ曰我邦ハ天  
地開闢ノ最初ニ国土ヲ成ス故ニヨツホニ日本ト  
名ク即チ支那ヨリモ此国ヲセベシ或セフニト  
呼フ按ニ日本ニ字ノ支那音ノ轉声ニメ即此邦  
做ス造コレ共ニ日曜ノ本原晝日ノ元始ト云フ  
美ナリ乃日光ノ赫耀亦他ノ諸洲ヨリハ最モ勝  
レリト称ス且コレニ加フルニ国中所在影ニク

金銀ヲ出ス故ニ其光輝自カラ映發ス因テ天下  
第一鮮明豊沢ナル美因ナリト云フ

按ニ本邦日ノ本ト称スルヲ傳聞セルナリ因  
中金銀ノ光明加ワルトイハシハ未タ聞サル

トコロナリ

予跋太亞胎亞在勤ノ貴官某ナル人ニ請テヨム  
バクニリスラニ上<sup>丑</sup>ト及野作地方ノ考説ヲ尋  
問ス乃一千六百九十六年<sup>日本元禄九年丙子</sup>ニ当テ予ニ

示シ志フルモノアリ曰

マルラン・ゲルリフト・フリイ・ス和菓人ナル者

ノ「カステル」号スル船ニ駕テ千六百四

十三年日本寛永二十年癸未既ニ亜細亞ノ北海ニ至ル

「アリ」予其日記ヲ觀ルニ「コムバグ」一「ラ

ン」ト「ロ」ト「ハ」一箇ノ嶋ナリトアリコレ信用ス

ルニ足ラザラシカ予熟ク考ルニ彼等其時ハ

北極出地四十二度按ニ蝦夷ノ南回「エ」モヨ

リ全四十九度按ニ唐太ノ「シ」ト「エ」ノ地方

連到リ「コムバグ」ニ「ス」ラシ「ト」ハ其西隅

ノ「三」ヲ通航セリ然レハ豈何ノ其西隅ヨリ全

地ノ廣大遼遠ナルヲ望ミ見ル「ヲ」得ニヤ按

此條「エ」ト「ロ」ニハ遠ク北方ニ延長予未タ是レ

シテ廣大ノ地ト思ヘリト「キ」コ「コ」予未タ是レ

一嶋ナルカ或北亜墨利加大洲ニ連接スルカ

甚疑惑セリ頃口伊斯把泥亞国ノ有名ナル船

師其偶予カ宅ニ来リ語テ曰「亜墨利加洲」ノ船

リ<sup>ホ</sup>ル<sup>ニ</sup>ア<sup>フ</sup> 利勿尔尼亞ノ北地ハ未タ幾何里西北ニ銳出  
シタルカコレヲ審ニスルモノナシト予亦大  
ニコノ未審トイフ説ニ拠ル且野作ノ北地モ  
亦幾何里遠ク突出シタルカ未タ知ラサル所  
ナリス野作トコムバグニリスラント<sup>口</sup>ト<sup>口</sup>ノ  
間ハ海水相隔テ通航スベキカ世ノ大ノ未タ  
嘗テ其確實ヲ究ムル者更ニナシ既ニ右ニ云  
フアリイ<sup>ハ</sup>ニナル者ハ其間海ヲ隔ノトイフノ

説ヲ云トイヘルコレ本ト其所ヲ經遍ク廻歷  
シテ云モノニ非ラス唯臆察ノ見ヲ述ルモノ  
ナリ若シ彼レ遠ク其北地ニ到ラハ果シテ野  
作トコムバグニリスラントハ相接シテ其間  
正ニ大湾ノ如クナルヲ見ルベシ然ルヲ海ヲ  
隔ツノ一島ナリトイフヲ見レハ是レ未タ嘗  
テ彼レカ実復實檢セサルトエロナリ假令彼  
既ニ四十九度ノ地ニ到リ其時海上濛氣深カ

ラストイヘ厄何ソ野作ノ畫境ヲ見畫スル能  
ワサルベシト思ワルレハナリ又日本人ノ説  
話ニ曰嘗テ野作人ノ去トコロヲ聞クニ本地  
ハ甚遠ク北方ニ鋭出ストイヘリ又曰我千六  
百八十四年日本貞享元年甲子ニ当テ国王ノ命ニ依テ  
野作地ニ到リ行程凡ソ三箇月路ヲ歴到着セ  
シ処ニ於テ支那製ノ絹布ヲ見タリ之レニ由  
テ考フレハ野作ハ韃靼ニ相接ニ即内地ニ接

属スルノ因ナルトハ疑ヒナカルベシトナリ  
又篤実善良ナル和策ノ高客「ヘシ」テサリキ・ラニ  
トイヘル者予ニ詰テ曰彼レ日本ニ居ル時彼  
国ノ船師ヨリ聞ケルトアリト蓋シ十二年以  
前其船師国命ヲ奉シテ日本ノ東海ニ到ル然  
ルニ瓜波甚烈シクメ東北ノ方ニ漂流セラレ  
テ遂ニ一大国ノ海濱ニ漂着ス即コノ処ニ於  
テ其年ノ越シタリトナリ又彼レ我カ国製ノ

地図ヲ見テ指示メ曰ク其彼カ漂着セシ処ハ  
当ニ此方位ナルベシトイヘリ其所ヲ見レハ  
即北亞墨利加ノ西北ニ臨ムノ地ナリ即其帰  
路ヲモ指シ示スコレヲ見ルニ其西北野作ノ近  
海トモ可思トコロヲ渡テ再ヒ帰国セリトキ  
コエ此語ヲ以テ考フルモ尚愈ク「エムバグニ  
」スラン止及野作ハ亞墨利加ノ地ニ接スル  
カ或大小ノ教島野作ヨリ起テ間隙ナク亞墨

利加ノ地ニ到ルマデ一帯ニ羅列シタルモノ  
カ敢テコレヲ推シ究ムベカラザル所ナリ又  
石「ンデ井リキ・ラ」ナル者日本ノ王府「エト」戸江  
ニ至ル途中ニ於テ按ニ「バ」レニテ「イ」ニ欲ノ  
撰書中ニ日本渡来加比丹  
ノ諸姓名ヲ挙ケタリ其中ニ此名ナシ然レバ  
其時ノ外科カ筆者ノ中ナルヘシ加比丹ニテ  
ハ非スト其北国ヨリ来ルトイフ旅客ニ逢フ  
知ラレシ  
「アリテ其姿貌性質ヲ覘ヒシニ殆ント北亞  
墨利加ノ人ニ似テ其言語ハ新和藁ノ土人ノ

言ニ等シト乃コレヲ見テ大ニ驚ケリトナリ

按ニ此諸考及諸説ニモ從フヘカラズ皆多クハ傳肉ノ失ト知ラルトナリ

クハ傳肉ノ失ト知ラルトナリ

○魯西亜帝ノ命ニ依テ支那北京ニ使スル「ユイス

フランシス・イデス按ニ此者彼一千六百九十三年

ユヨリ支那ニ使スルモ海陸巡檢紀事ト云魯西

見ヘナル者野作「ユイスカアス」北方ノ盡頭及長

牆按ニ萬里ノ外ナル韃靼ノ処々河水ノ説ヲ予

長城ヲ云

送リ示スモノアリ左ニ載ス

予野作ノ地方ヲ按ニコレ韃靼ニ接スルニ非

ス又其南北ノ近隣ノ地ニモ連接セス古ヨリ

未タ「ユイスカアス」前ニ東方ニ至ルモノナ

シ其「ユイスカアス」ノ東方ニモ恐ラクハ北方

ノ誤トニハ一大河ヲゴト按ニ「ユイスカアス」ト云

アリユノ河ノ下流ニ派ニ分ル其一ヲ「ユグ」ト

云ヒ其一ヲ「ユカ」ト云自註ニ曰此辺皆共ニ

魯西亜ニ屬ス

「アムル」河江黒龍 = 入り終 = 北海 = 注ク 按ニ此  
ル者ナリ西洋新製ノ諸地因テ見ル = 可クハ河  
ハ「カク」河ノ南ニ在リテ全ク別河ナリ共ニ  
黒龍江ノ北ニ在テ「アム」コノ辺ノ沿海中島多  
シ「ハ」遠ニ間テ「ハ」ダツク  
シ其時ヤチユツト又予ニ諸テ曰 自注ニ曰ユレ  
スルモ 亦魯西亜ニ属  
ナリ三年前

按ニ「アキユツト」ハ止白里亞中ニ在リ魯西亜  
人呼テ「ヤマウツカ」ト云モノコレナリ  
ユノ辺ノ国中 按ニ「アホツカ」ニ於テユノ 近嶋  
辺テ「ア」フカ

ノ土人ニ逢フタル「ア」リ即其言語ヲク我々  
「アキユツト」語ニ似テ長ケハ高ク姿容至テ尊大  
ニ見ヘタリ彼レニ極テ美ナル「ア」サ 按ニ  
「シ」名ツ 「アキユツ」 及玄狐ノ皮ヲ携ヒ来リ我国 「アキユツ」  
「ボ」リ 「アキユツ」 ノ処女ノ製シタル一種ノ草ト交易ニ去レリ  
ト予コレヲ察スルニコノ者ハ必ス野作ノ土  
人ナルベシ○野作ノ北界ヨリ「ア」スカ「ア」ズ  
前ニ 註ス 間ニハ 「ア」 救多ノ小島羅列シタルト見え

ルナリ〇「キシシ」ガル一各「シキシ」ガル按ニ錦  
ラ云ナ河ハ「コリイシ」按ニ「キク」之及「カマシ」河  
自注ニ曰此ニ川共ノ間ヲ流レテ「アムル」河ニ  
入ル〇「アウ」トシテ遼東ハ彼驚異スベキ高大  
ナル支那長城ノ外ニ在リテ「ウ」之漢音  
ト其界ヲ接ス即コレ「アモ」ロ「グ」ト「カン」ス按ニ  
「ロ」グトハ「金」某帝ナルトイヘル支那帝ノ生国  
ベシ「ガ」シハ「シ」ハ「行」ナリ  
ナリ此地ヲ遼東キ「シシ」ガル河ノ辺ニ起リ「子」ル

ツシシスク迄ニ至レリ

按ニゼ「ア」地ア統載ノ書中ニ曰「子」ルツシシスク  
ハ支那人呼テ「ゴ」ブ「コ」ウト云フ此地「ア」ム  
ル河ノ辺ニ在テ柵ヲ以テ其地ノ周辺ヲ圍  
ミタル一府アリ此地北極出地凡五十二度  
ニ在テ氣候宜キニ適ス此既ニ世ニ名アル  
所以ハ一千六百八十九年日本元禄二十已  
年支那ト魚日西亞ト和睦ヲ約セシ地ナレハ



ナリ乃其後魯西亞ヨリハ使節ヲ支那ノ北  
京ニ遣シ支那ヨリモ亦使ヲ魯西亞ノ都府  
ベテルスブルグニ送りシトアリ

カガリイニウテ薩哈及アマヒ江黒竜河ノ進傍

アルバシニ按ニコレ雅克ノ諸山及「シウシウ

直ノ地追ハ皆支那ニ属スルモノナリ韃靼

ノ曠野アルグーニ按ニ北極出地五十一度半

ヨリ「タルカシニヤ」按ニコレ「トルヘ」ハ即「百都

訖ナ「キシキカル」按ニ「察哈」ノ三部ト「メルゲ  
一ニ府按ニ莫勒及「ツ」ニ河按ニ「察哈」里  
勒浪ノ方ニ流ノ北方ナル諸国ヲカノ地方ニ  
於テハ「タラ」止或「タウ」止按ニ「タウ」止ハ  
西洋古製ノ因皆黒竜江ノ北也ヨリ其西ト總  
方蒙古ノ地方迄ヲ斯ク總称シタルナリト總  
称スコノ諸処ニハ種々ノ人物雜居ス都テ皆  
「ヤマシ」ニシテ妖濟ヲ行フトイヘリ  
按ニ「ヤマシ」トイヘルハ止白里亞ノ処々

ニ居テ妖法ヲ行フ者ノ惣色ナリ文化元年  
甲子長崎ニ来ル魯西亞船ヨリ齎シ来ルト  
ユロノ其僑国人物凶中ニ此ヨリヤマシノ凶ア  
リ其容姿衣服都テ凡俗ト異ニシテ且チニ  
鼓ト桴トヲ持テリ又勢州ノ漂客光太夫ニ  
聞クニ「アホツカ」ヨリ其帝都ニ至ル途中ニ  
於テ往々コレヲ見タルコトアリトナリ

千六百四十三年 日本寛永ニ 海船二艘一ヲアレ  
十年癸未

スレ其一ヲ「カステ」井リキユト号スルモノ同時ニ  
出帆シテ共ニ韃靼ノ地方ヲ尋訪セントス

按ニ此ノ「カステ」井リキユトイヘル船訪知ノ紀  
事ハ既ニ前ニモ出ス又後ニモ出ス記者ニ因  
テ大同小異アルノミ

然ルニ此船未タ其処ニ至ラスシテ日本ノ東海  
ニ漂流シ遂ニ日本ト野作トノ海峡ヲ通航シテ  
按ニ野作ト日本トノ海峡ヲ通航スルト云ハ非  
ナリ即野作ト「カステ」トノ間ヲ通航スト後ニ

見へ 其六月 按ニ我小端ヨリ 野作地ヲ巡覽ス  
タリ 夏至ノ間ニ当ル 其始ノ至ルノ地ハ赤道北緯四十一度五十分東  
西經度一百六十四度四十八分 按ニ蝦夷ノ南岸  
シルベノ処ナリ此海濱其銳出シタル処ニハ巖山  
壁立シテ遠ク是ヲ望ミ見レハ恰モ布帆ヲ卷キ  
揚ケタルカ如シ 即其教總テ十箇アリト云フ又  
コレヨリ大洲渚起テ凡一里許リ海中ニ銳出シ  
タルアリ此辺ニ於テ小舟ヲ漂ク者ヲ見ル其舟

人各手ニ一條ノ擢ヲ持ツ其擢ヲ以テ水ヲカク  
テ見ルニ先其一方ニ居ル者 俟ヒ始メテ水中ニ  
入ル又其一方ニ居ル者 コレニ續テ使フテ相同  
シ但左右一同ニ使リスシテ カタカヒ 参差ヲナスコノ滑  
方ヲ以テ能ク大海ヲモ渡ルナリ其舟人ノ姿貌  
ハ猛勇ミ見ヘ色黒ク粗ク長キ髭ヲ垂ル惣身  
ハ淡黒ニシテ頭髮亦長シ其額上ノ部ハ皆短ク  
コレヲ裁ツナリ 彼等礼拜スルヲ見ルニ毎ニ西

予ヲ頭上ニ仰ク衣服ハ皆熊皮ヲ用フ又弓矢ヲ  
携ヘタリ此処ヨリ船ヲ東方ニ進メ自注ニ曰コ  
船中ノ水夫等数多ノ  
カベリヤ之ヲ獲タリ

按ニ東方ニ進メ云ナル東方ハ「クナシリ」ノ  
東方ナリ即「エトロク」ノ方ヲサシテ云  
フ又右自注中ニ「カベリヤ」ト云ハ鯨魚ノ  
ト覺ユ然レ共後ニハ処々「カベリヤ」ト稱シク  
有リナト云テ以テ見レハ大口魚ナルカ形似

タルヲ以テ鯨魚ト見誤ルモノナルヘシ因テ  
以下「カベリヤ」トスルモノ皆大口魚ト譯ス  
既ニ北極出地四十三度零四分ノ処按ニ「エトロク」ノ南海ヲ  
カニ至レハ遙ニ一國ヲ遠望ストナリ

按ニ「エトロク」或「クナシリ」ヲ南ヨリ遠望シタ  
ル「クナシリ」度数大抵コレニ當ル  
北極出地四十四度零四分ノ度ヲ得ル海ニ到シ  
ハ按ニ東蝦夷地ニシテ其辺ノ小舟我船ノ傍ニ

未ル其舟中ナル人ノ姿貌ヲ見ルニ亦猛勇ニシ  
テ其中ニ一婦人アリ其顔色淡黒ニシテ唇及両  
手ニハ文ヲナシタリ其頭髮ハ我ノ幼穉ノ者  
ノ如ク凡三指横徑許リ耳下ノ処ニ於テコレヲ  
裁ツ彼等最モアテキムヲ愛セリ  
種此ニ去ッ夷人愛スト云モ  
ノハ手造リノ濁酒ナルヘシ其中ニ日本服ヲ着  
スルモノアリ或ハ又十字形ヲ縫ヒ飾リタル服  
ヲ着スルアリ皆弓矢及刀劔等ヲ携フ其形亦日

本刀ニ似テ柄ニハ全銀ヲ以テ鍔ヌタリ其刀ヲ  
佩ル組ハ絹片ヲ以テ縫ヒ附テ飾レリ彼レカ耳  
垂ノ小孔銀鍔或ハ珊瑚珠ノ如キモノヲ懸ク按  
十字形トイフモノハアツシニ綿布ヲ以テ異形  
ヲフセ縫ヒシタルモノ自ラ十字形ノ如キモノ  
ヲ見テイフナルベシ刀劔ハ我カ所謂大刀ヲ佩  
タル本邦ヨリ昔時渡セシ其説ク所ノ似タルハ  
穿ツ銀鍔ハ正銀カス鍔銀ナラシカ珊瑚珠トイ  
フモハ尤怪シ赤ク製シタルヘシ其并ハ獨木  
ヲ割メ造リ且処々ニ文彩ヲ彫刻シタリ又北極

出地四十三度四十五分及四十四度十二分東西  
經度一百六十七度二十一分ノ處ニ於テ陸地ヲ  
望ム按ニコトコシラ云カ其地高クメ又秋嶋ヲナ  
スアリ此處ヨリ少シク北方ニ於テスラインエ  
ロリス及セイログヘニ按ニ共ニ海獸ノ名海獺  
水豹ノ類カ未タ否ラ  
知ラノ海上ニ浮ミ出タルヲ見タリ  
又北極出地四十五度十二分東西經度一百六十  
九度二十分ノ處ニ於テ遙ニ嶋ノ如キ陸地ヲ遠

見ス然レニ漸ク是ニ近ツキ見ルニ島ニアラス  
シテ大地ニ接属スルノ地ナリ按ニコトコシノ  
西隅ヲ見タルモ  
ノカク此處常ニ積雪アリ即チ上陸シテ其國中  
ヲ覗フニ枯木ノ外更ニ物ナシ但此海濱ヨリ遠  
カラスミテ山澗ヨリ清水流レ出ルアリ又其處  
ニ因テハ櫻樹及其他小樹林ヲナスヲ見タリ又  
酸摸交葱アサツキノ菜及葎ハハノ菜生シタル處アリ爰ニ  
住民ナク唯狐ノ外更ニ生菜ヲ見ス又北極出地

四十六度十三分東西經度一百七十二度一十六  
分及五十三分ノ間ニ於テ一高山ヲ望ミ見タリ  
按ニ蝦夷北面ナルウナ又北極出地四十七度零  
七分東西經度一百七十二度五十三分ノ處唐太  
ノ東面ヲ見タルナリ於テ陸地ヲ見ル然レモ茲ニ上陸  
セストイヘリ

又石航海日記中ニ曰日本ノ東邊自注ニ曰コレ北極出地三十一度零四分ニ去ルテ東方二十二度ニシテ北  
在ル處ヲ云

極出地四十五度四十二分ノ處ヨリ東北東東ノ  
及南西西未ノニ當テ亜墨利加ノ地アルハ敢  
テ疑フトコロニ非ズ即既ニ此邊ニ到リ其地方  
ヲ望ムニ積雪アリ且陰霧深クシテ人民ノ有無  
ヲ弁スルヲ能ワサリシト云々此日記中ニハ唯  
野作ノ近海ヲ通航セシコトノミヲ云テ「コムハ  
グニースラン」五トニ到ルヤ否ヤコレヲ載セ  
テ詳ニセス亦其船師等アリイニ海峡按ニ「五ト」

ナシト云ノ 等ハ更ニ知ラサルト見ユルナリ  
海峡ヲ云 其船ヲ再ヒ日本ノ東辺北極出地三十七度ノ処  
ニ返ヘシ 按ニ常陸ノ 是レヨリ北亞墨利加洲ノ  
海岸及其辺ノ諸嶋ヲ尋訪セントメ又船ヲ其東  
方ニ進ム北海路中既ニ樹木及定席ノ如キモノ  
東ニ向テ流レ又其ノ海面ニ浮ミタルアリ且鴈  
及其他白色ノ鳥類北ヨリ南ニ飛行シ又此辺ノ  
水上ニ泡沫常ニ浮ミ流レ又草鞋ノ舊棄セルモノ

ノ流レ未ルアリコレニ因テ考フルニコノ辺ヲ  
距ル一一度ニ足ラスシテ果シテ陸地アラント  
察セラル尚ヲ船ヲ東方ニ進ル一既ニ四百八十  
里 日本ノ大島ニ及ベリ然ルニ更ニ陸地ヲ見ス  
トイヘリ是ヲ以テ推考スレハ北亞墨利加ノ北  
ハ遠ク西方ニ突出シテ凡コトムバクニトスラン  
トコトノ近辺ニ到ルモノナラン此船師ハ日本  
ノ東海ヨリ直ニ亞墨利加ニ到リ其処々ヲ訪知



セシ<sup>レ</sup>ラ<sup>ク</sup>欲ストイヘ<sup>ル</sup>不幸ニメ水夫ノ中疾病  
ニ罹リ或死スルモノ多キガ故ニ止ムヲ得ヌメ  
コレヲ瘞シ再<sup>レ</sup>日本ノ近海ヲ經テ臺灣ニ歸ル  
既ニ帰船シテ後愈其志ヲ達セサル<sup>レ</sup>ヲ嘆メ大  
ニ悔シタリト云云

按ニ此頃ハ和蘭人臺灣ニ君住シ城郭ヲ搆ヘ  
日本反支那トノ交易ヲ嘗<sup>ニ</sup>ミシトキナリ此船  
コレスケカカステ井リキエハ<sup>ニ</sup>詳ラカナラズ然

レ此本文ヲ以テ考フレバコレスケナルベシ

野作雜記譯說卷之二終



